

元受刑者が社員の会社発足

「前科ある」言えない人の受け皿

元受刑者が社員となり、清掃などを請け負う会社「Ruth（ルツ）」―東京都墨田区―が発足した。元受刑者の多くは刑務所にいたことを周囲に言えず、就職で苦労するケースが少なくない。ルツはそうした人に働きやすい環境を提供し、社会復帰を後押しする。

(中山岳)

都内のマンション。使わなくなった古いパソコンやコンセントなどが足の踏み場もないほど散乱している部屋を、ルツの社員が手際良く分別していく。現場責任者の男性(左)は「お客が喜んでくれるように、丁寧な仕事を心掛けています」と話す。

男性は二十代で暴力団に関わり強盗事件などを起こして二回、服役した。四年前に出所。製造業の会社に正社員として就職したものの「同僚らに前科があると言えず、仕事を続けるのが

感謝される経験 働く土台に

つらくなった」と振り返る。その会社は半年間ほど働いて退職した。

ルツではこの男性(元受刑者四人が働き、首都圏を中心に草刈りや引っ越しなども手掛けている。男性は「お客から感謝されるありがたさを感じている。将来は資格を取って造園業を始めたい」と語る。

ルツは、元受刑者の社会復帰を支援するNPO法人「マザーハウス」(墨田



マンションの一室で清掃作業をするルツの社員―東京都内

区)の五十嵐弘志理事長(五〇や、付き合いのある公認会計士らが株主となって先月、設立した。五十嵐さんも元受刑者で、出所後の就職活動で百社以上断られた。「多くの元受刑者は正社員になれず、派遣労働の仕事などをしている。そうした暮らしを続けている」と、将来設計がしづらい。

「社会の人々 受け入れる意識を」

ルツが安定して長く働ける受け皿になればいい」と唱える。

五十嵐さんは元受刑者に、無償でコピー販売などをさせた後、働く希望があればルツを紹介している。「社会に奉仕し、人に感謝される経験をする。自分は一人居ないという意識が育まれ、働くための土台になる」という。

社名は、服役中にキリスト教徒になった五十嵐さんが、旧約聖書に登場する落ち穂拾いの女性「ルツ」から取って付けた。この女性のように、多くの人がやりたがらないような仕事も献身的にこなす会社を目指している。

犯罪白書によると、前科や前歴のある人を雇っている企業、個人事業主などのうち、法務省が把握している「協力雇用主」は二〇一九年時点で千五百余。二千二百人ほどが雇用され、十年前と比べ約五倍に増えた。ただ、経営者が前科などを把握した上で採用して、他の社員が知らないこと

職場でストレスを感じて短期で退職する元受刑者も多い。

元法務官僚で刑務所の勤務経験もある龍谷大の浜井浩一教授(犯罪学)は、問題の背景に刑務所と社会生活の間にあるギャップを挙げる。「受刑者はトイレに行くことすら許可が必要で、工場作業も指示を受けてロボットのようにならず。ひたすら我慢する生活なので自発性やコミュニケーション能力が育たない。そのため社会復帰後に就職しても周囲との付き合いに行き詰まり、うまくいかない」

浜井さんは「刑務所でも自発性や自律性を育てるよう、作業の在り方を少しずつ改善していくことが必要だ」と述べる一方、社会の意識を変える重要性を説く。「元受刑者は『刑務所帰り』という引け目を感じ、社会で認められる実感をなかなか持てずにいる。社会の人々が、市民の一人として受け入れる意識を持つことも求められている」